

与謝野晶子訳

源氏物語 桐壺卷



一冊堂青空文庫



源氏物語

桐壺

紫式部

與謝野晶子訳

紫のかがやく花と日の光思ひあはざる

ことわりもなし

(晶子)

どの天皇様の御代<sup>みよ</sup>であつたか、女御<sup>によご</sup>とか更衣<sup>こうい</sup>とかいわれる後宮<sup>こうきゆう</sup>がおおぜいいた中に、最上の貴族出身ではないが深い御愛寵<sup>あいちゆう</sup>を得

ている人があつた。最初から自分こそはという自信と、親兄弟の勢力に恃たのむ所があつて宮中にはいった女御たちからは失敬な女としてねたまれた。その人と同等、もしくはそれより地位の低い更衣たちはまして嫉妬しつとの焰ほのおを燃やさないわけもなかった。夜の御殿おとどの宿直所とのいどころから退さがる朝、続いてその人ばかりが召される夜、目に見耳みみに聞いて口惜くちおしがらせた恨みのせいもあつたかからだが弱くなつて、心細くなつた更衣は多く実家へ下がつていがちというこ  
とになると、いよいよ帝みかどはこの人にばかり心をお引かれになるという御様子で、人が何と批評をしようともそれに御遠慮などというものがおできにならない。御聖徳を伝える歴史の上にも暗い影

の一所残るようなことにもなりかねない状態になった。高官たちも殿上役人たちも困って、御覚醒かくせいになるのを期しながら、当分は見ぬ顔をしていたいという態度をとるほどの御寵愛ちゆうあいぶりであった。唐の国でもこの種類の寵姫ちようき、楊家の女じよの出現によって乱が醸かもされたなどと蔭かげではいわれる。今やこの女性が天下の煩わづわいだとされるに至った。馬嵬ばかいの駅がいつ再現されるかもしれぬ。その人にとっては堪えがたいような苦しい雰囲気ふんいきの中でも、ただ深い御愛情だけをたよりにして暮らしていた。父の大納言だいなごんはもう故人であつた。母の未亡人が生まれのよい見識のある女で、わが娘を現代に勢力のある派手はでな家の娘たちにひけをとらせないよき保護者

たりえた。それでも大官の後援者を持たぬ更衣は、何かの場合にいつも心細い思いをするようだった。

前生ぜんしやうの縁が深かったか、またもないような美しい皇子までがこの人からお生まれになった。寵姫を母とした御子みこを早く御覧になりたい思召おぼしめしから、正規の日数が立つとすぐに更衣母子おやこを宮中へお招きになった。小皇子しょうおうじはいかなる美なるものよりも美しい顔をしておいでになった。帝の第一皇子は右大臣の娘の女御からお生まれになって、重い外戚がいせきが背景になっていて、疑いもない未来の皇太子として世の人は尊敬をささげているが、第二の皇子の美び貌ぼうにならぶことがおできにならぬため、それは皇家おうけの長子として

大事にあそばされ、これは御自身の愛子<sup>あいし</sup>として非常に大事がつておいでになった。更衣は初めから普通の朝廷の女官として奉仕するほどの軽い身分ではなかった。ただお愛しになるあまりに、その人自身は最高の貴女<sup>きじょ</sup>と言ってよいほどのりっぱな女ではあったが、始終おそばへお置きになろうとして、殿上で音楽その他のお催し事をあそばす際には、だれよりもまず先にこの人を常の御殿へお呼びになり、またある時はお引き留めになって更衣が夜の御殿から朝の退出ができずそのまま昼も侍しているようなことになったりして、やや軽いふうにも見られたのが、皇子のお生まれになって以後目に立って重々しくお扱いになったから、東宮にも

どうかすればこの皇子をお立てになるかもしれぬと、第一の皇子の御生母の女御は疑いを持っていた。この人は帝の最も若い時に入内した最初の女御であつた。この女御がする批難と恨み言だけは無関心にしておいでになれなかつた。この女御へ済まないという気も十分に持つておいでになつた。帝の深い愛を信じながらも、悪く言う者と、何かの欠点を捜し出そうとする者ばかりの宮中に、病身な、そして無力な家を背景としている心細い更衣は、愛されれば愛されるほど苦しみがふえるふうであつた。

住んでいる御殿は御所の中の東北の隅のような桐壺であつた。幾つかの女御や更衣たちの御殿の廊を通い路にして帝がしばしば



そこへおいでになり、宿直とのいをする更衣が上がり下がりして行く桐壺であつたから、始終ながめていねばならぬ御殿の住人たちの恨みが量かさんでいくのも道理と言わねばならない。召されることがあまり続くころは、打ち橋とか通い廊下のある戸口とかに意地の悪い仕掛けがされて、送り迎えをする女房たちの着物の裾すそが一度でいたんでしまうようなことがあつたりする。またある時はどうしてもそこを通らねばならぬ廊下の戸に錠がさされてあつたり、そこが通れねばこちらを行くはずの御殿の人どうしが言い合わせで、桐壺の更衣の通り路みちをなくして辱はずかしめるようなことなどもしばしばあつた。数え切れぬほどの苦しみを受けて、更衣が心をめ

いらせているのを御覧になると帝はいつそう憐れあわを多くお加えになつて、清涼殿せいりやうでんに続いた後涼殿こうりやうでんに住んでいた更衣をほかへお移しになつて桐壺の更衣へ休息室としてお与えになつた。移された人の恨みはどの後宮こうきゆうよりもまた深くなつた。

第二の皇子が三歳におなりになつた時に袴着はかまぎの式が行なわれた。前にあつた第一の皇子のその式に劣らぬような派手はでな準備の費用が宮廷から支出された。それにつけても世間はいろいろに批評をしたが、成長されるこの皇子の美貌びぼうと聡明そうめいさとが類のないものであつたから、だれも皇子を悪く思うことはできなかつた。有識者はこの天才的な美しい小皇子を見て、こんな人も人間世界に

生まれてくるものと皆驚いていた。その年の夏のことである。

御息所<sup>みやすどころ</sup>——皇子<sup>おうじ</sup>女<sup>じよ</sup>の生母になった更衣はこう呼ばれるのである——

——はちよつとした病氣になつて、実家へさがろうとしたが帝はお許しにならなかつた。どこからだが悪いということはこの人の常のことになつていたから、帝はそれほどお驚きにならずに、

「もうしばらく御所で養生をしてみてもからにするがよい」

と言つておいでになるうちにしだいに悪くなつて、そうなつてからほんの五、六日のうちに病は重体になつた。母の未亡人は泣く泣くお暇を願つて帰宅させることにした。こんな場合にはまたどんな呪詛<sup>じゆそ</sup>が行なわれるかもしれない、皇子にまで禍<sup>わざわ</sup>いを及ぼし

てはとの心づかいから、皇子だけを宮中にとどめて、目だたぬように御息所だけが退出するのであった。この上留めることは不可能であると帝は思召して、更衣が出かけて行くところを見送ることのできぬ御尊貴の御身の物足りなさを堪えがたく悲しんでおいでになった。

はなやかな顔だちの美人が非常に瘦<sup>や</sup>せてしまつて、心の中には帝とお別れして行く無限の悲しみがあつたが口へは何も出して言うことのできないのがこの人の性質である。あるかないかに弱っているのを御覧になると帝は過去も未来も真暗<sup>まっくら</sup>になつた気があそばすのであつた。泣く泣くいろいろな頼もしい将来の約束をあそ

ばされても更衣はお返辞もできないのである。目つきもよほどだ  
るそうで、平生からなよなよとした人がいつそう弱々しいふうに  
なつて寝ているのであつたから、これはどうなることであろうと  
いう不安が<sup>おおみこころ</sup>大御心を襲うた。更衣が宮中から<sup>れんしゃ</sup>輦車で出てよい御許  
可の<sup>せんじ</sup>宣旨を役人へお下しになつたりあそばされても、また病室へ  
お帰りになると今行くということをお許しにならない。

「死の旅にも同時に出るのがわれわれ二人であるとあなたも約束  
したのだから、私を置いて家<sup>うち</sup>へ行つてしまふことはできないはず  
だ」

と、帝がお言いになると、そのお心持ちのよくわかる女も、非

常に悲しそうにお顔を見て、

「限りとて別るる道の悲しきにいかまほしきは命なりけり

死がそれほど私に迫って来ておりませんのでしたら」

これだけのことを息も絶え絶えに言って、なお帝にお言いしたいことがありそうであるが、まったく気力はなくなってしまうた。死ぬのであったらこのまま自分のそばで死なせたいと帝は思<sup>おほ</sup>召<sup>しめ</sup>したが、今日から始めるはずの祈<sup>き</sup>禱<sup>とう</sup>も高僧たちが承<sup>うけ</sup>っていて、それもぜひ今夜から始めねばなりませんというようなことも申し

上げて方々から更衣の退出を促すので、別れがたく思召しながらお歸しになった。

帝はお胸が悲しみでいっぱいになってお眠りになることが困難であつた。歸つた更衣の家へお出しになる尋ねの使いはすぐ歸つて来るはずであるが、それすら返辞を聞くことが待ち遠しいであろうと仰せられた帝であるのに、お使いは、

「夜半過ぎにお卒去かくれになりました」

と言って、故大納言家の人たちの泣き騒いでいるのを見ると力が落ちてそのまま御所へ歸つて来た。

更衣の死をお聞きになった帝のお悲しみは非常で、そのまま引

きこもっておいでになった。その中でも忘れがたみの皇子はそばへ置いておきたく思召したが、母の忌服中きふくの皇子が、穢けがれのやかましい宮中においてになる例などはないので、更衣の実家へ退出されることになった。皇子はどんな大事があつたともお知りにならず、侍女たちが泣き騒ぎ、帝のお顔にも涙が流れてばかりいるのだけを不思議に思いになるふうであつた。父子の別れというようなことはなんでもない場合でも悲しいものであるから、この時の帝のお心持ちほどお気の毒なものではなかつた。

どんなに惜しい人でも遺骸いがいは遺骸として扱われねばならぬ、葬儀が行なわれることになって、母の未亡人は遺骸と同時に火葬の



煙になりたいと泣きこがれていた。そして葬送の女房の車にしいて望んでいっしょに乗って愛宕おたぎの野にいかめしく設けられた式場へ着いた時の未亡人の心はどんなに悲しかったであろう。

「死んだ人を見ながら、やはり生きている人のように思われてならない私の迷いをさますために行く必要があります」

と賢そうに言っていたが、車から落ちてしまいそうに泣くので、こんなことになるのを恐れていたと女房たちは思った。

宮中からお使いが葬場へ来た。更衣に三位さんみを贈られたのである。勅使がその宣命せんみょうを読んだ時ほど未亡人にとって悲しいことはなかった。三位は女御にょぎに相当する位階である。生きていた日に女

御とも言わせなかったことが帝には残り多く思召されて贈位を賜わったのである。こんなことででも後宮のある人々は反感を持っていた。同情のある人は故人の美しさ、性格のなだらかさなどで憎むことのできなかった人であると、今になって桐壺の更衣の真価を思い出していた。あまりにひどい御殊寵ぶりであったからその当時は嫉妬を感じたのであるとそれらの人は以前のことを思っていた。優しい同情深い女性であったのを、帝付きの女官たちは皆恋しがっていた。「なくてぞ人は恋しかりける」とはこうした場合のことであろうと見えた。時は人の悲しみにかかわりもなく過ぎて七日七日の仏事が次々に行なわれる、そのたびに帝からはお弔

いの品々が下された。

愛人の死んだのちの日がたつていくにしたがつてどうしようもない寂しさばかりを帝はお覚えになるのであつて、女御、更衣をとのい宿直に召されることも絶えてしまった。ただ涙の中の御朝夕であつて、拝見する人までがしめっぽい心になる秋であつた。

「死んでからまでも人の気を悪くさせる御寵愛ぶりね」

などと言つて、右大臣の娘の弘徽殿こきでんの女御によごなどは今さえも嫉妬を捨てなかつた。帝は一の皇子を御覧になつても更衣の忘れがたみの皇子の恋しさばかりをお覚えになつて、親しい女官や、御自身のお乳母めのとなどをその家へおつかわしになつて若宮の様子を報告

させておいでになった。

野分のわきふうに風が出て肌寒はださむの覚えられる日の夕方に、平生よりも  
いっそう故人が思われになって、鞆負ゆげいの命婦みょうぶという人を使いと  
してお出しになった。夕月夜の美しい時刻に命婦を出かけさせ  
て、そのまま深い物思いをしておいでになった。以前にこうした  
月夜は音楽の遊びが行なわれて、更衣はその一人に加わってすぐ  
れた音楽者の素質を見せた。またそんな夜に詠よむ歌なども平凡で  
はなかった。彼女の幻は帝のお目に立ち添って少しも消えない。  
しかしながらどんなに濃い幻でも瞬間の現実の価値はないのであ  
る。

命婦は故大納言家だいなごんに着いて車が門から中へ引き入れられた刹那せつなからもう言いようのない寂しさが味わわれた。未亡人の家であるが、一人娘のために住居すまいの外見などにもみすばらしさが無いようにと、りっぱな体裁を保って暮らしていたのであるが、子を失った女主人おんなあるじの無明むみょうの日が続くようになってからは、しばらくのうち庭の雑草が行儀悪く高くなった。またこのごろの野分の風でいっそう邸内が荒れた気のするのであったが、月光だけは伸びた草にもさわらずさし込んだその南向きの座敷に命婦を招じて出て来た女主人はすぐにもものが言えないほどまたも悲しみに胸をいっぱいにしていた。

「娘を死なせました母親がよくも生きていられたものというように、運命がただ恨めしゅうございますのに、こうしたお使いが荒<sup>あば</sup>ら屋へおいでくださるとまたいつそう自分が恥ずかしくてなりません」

と言って、実際堪えられないだろうと思われるほど泣く。

「こちらへ上がりますと、またいつそうお気の毒になりまして、魂も消えるようでございますと、先日典侍は陛下<sup>ないしのすけ</sup>へ申し上げていらっしやいましたが、私のようなあさはかな人間でもほんとうに悲しさが身にしみます」

と言ってから、しばらくして命婦は帝の仰せを伝えた。

「当分夢ではないであろうかというようにばかり思われましたが、ようやく落ち着くとともに、どうしようもない悲しみを感ずるようになりました。こんな時はどうすればよいのか、せめて話し合う人があればいいのですがそれありません。目だたぬようにして時々御所へ来られてはどうですか。若宮を長く見ずにいて気がかりでならないし、また若宮も悲しんでおられる人ばかりの中においてかわいそうですから、彼を早く宮中へ入れることにして、あなたもいっしょにおいでなさい」

「こういうお言葉ですが、涙にむせ返っておいでになって、しかも人に弱さを見せまいと御遠慮をなさらないでもない御様子がお

気の毒で、ただおおよそだけを承っただけでまいりました」

と言って、また帝のお言<sup>こと</sup>づてのほかの御消息を渡した。

「涙でこのごろは目も暗くなっておりますが、過分なかたじけない仰せを光明にいたしまして」

未亡人はお文<sup>ふみ</sup>を拝見するのであった。

時がたてば少しは寂しさも紛れるであろうかと、そんなことを頼みにして日を送っていても、日がたてばたつほど悲しみの深くなるのは困ったことである。どうしているかとばかり思っている小児<sup>こども</sup>も、そろった両親に育てられる幸福を失ったものであるから、子を失ったあなたに、せめてその子の代わりと



して面倒めんどうを見てやってくれることを頼む。

などこまごまと書いておありになった。

宮城野みやぎのの露吹き結ぶ風の音おとに小萩こはぎが上を思ひこそやれ

という御歌もあったが、未亡人はわき出す涙が妨げて明らかに  
は拝見することができなかつた。

「長生きをするからこうした悲しい目にもあうのだと、それが世  
間の人の前に私をきまり悪くさせることなのでございますから、  
まして御所へ時々上がることなどは思いもよらぬことでございま

す。もったいない仰せを伺っているのですが、私が伺候いたしま  
すことは今後も実行はできないでございましょう。若宮様は、や  
はり御父子の情というものが本能にありますものと見えて、御所  
へ早くおはいりになりたい御様子をお見せになりますから、私は  
ごもつともだとおかわいそうに思っておりますということなど  
は、表向きの奏上でなしに何かのおついでに申し上げてください  
ませ。良人<sup>おっと</sup>も早く亡<sup>な</sup>くしますし、娘も死なせてしまいましたよう  
な不幸づくめの私が御いっしょにおりますことは、若宮のために  
縁起のよろしくないことと恐れ入っております」

などと言った。そのうち若宮ももうお寝<sup>やす</sup>みになった。

「またお目ざめになりますのをお待ちして、若宮にお目にかかりまして、くわしく御様子も陛下へ御報告したいのでございますが、使いの私の帰りますのをお待ちかねでもいらっしゃいますでしょうから、それではあまりおそくなるでございましょう」

と言って命婦は歸りを急いだ。

「子をなくしました母親の心の、悲しい暗さがせめて一部分でも晴れますほどの話をさせていただきたいのですから、公のお使いでなく、気楽なお気持ちでお休みがてらまたお立ち寄りください。以前はうれしいことでよくお使いにおいでくださいましたのですが、こんな悲しい勅使であなたをお迎えするとは何という

ことでしょう。返す返す運命が私に長生きさせるのが苦しゅうございます。故人のことを申せば、生まれました時から親たちに輝かしい未来の望みを持たせました子で、父の大納言だいなごんはいよいよ危篤になりますまで、この人を宮中へ差し上げようと自分の思ったことをぜひ実現させてくれ、自分が死んだからといって今までの考えを捨てるようなことをしてはならないと、何度も何度も遺言いたしました。が、確かな後援者なしの宮仕えは、かえって娘を不幸にするようなものではないだろうかとも思いながら、私にいたしましてはただ遺言を守りたいばかりに陛下へ差し上げましたが、過分な御寵愛を受けまして、そのお光でみすばらしさも隠し

ていただいて、娘はお仕えしていたのでしようが、皆さんの御嫉妬の積もっていくのが重荷になりました、寿命で死んだとは思えませんような死に方をいたしましたのですから、陛下のあまりに深い御愛情がかえって恨めしいように、盲目的な母の愛から私は思いもいたします」

こんな話をまだ全部も言わないで未亡人は涙でむせ返ってしまったりしているうちにますます深更になった。

「それは陛下も仰せになります。自分の心でありながらあまりに穏やかでないほどの愛しようをしたのも前生ぜんしょうの約束で長くはいっしょにおられぬ二人であることを意識せずに感じていたのだ。自

分らは恨めしい因縁でつながれていたのだ、自分は即位そくいしてから、だれのためにも苦痛を与えるようなことはしなかったという自信を持っていたが、あの人によって負ってならぬ女の恨みを負い、ついには何よりもたいせつなものを失って、悲しみにくれて以前よりももっと愚劣な者になっているのを思うと、自分らの前生の約束はどんなものであったか知りたいとお話になって湿っぽい御様子ばかりをお見せになっています」

どちらも話すことにきりがない。命婦みょうぶは泣く泣く、

「もう非常に遅いおそようですから、復命は今晚のうちにいたしたいと存じますから」

と言つて、帰る仕度したくをした。落ちぎわに近い月夜の空が澄み切った中を涼しい風が吹き、人の悲しみを促すような虫の声がするのであるから帰りにくい。

鈴虫の声の限りを尽くしても長き夜飽かず降る涙かな

車に乗ろうとして命婦はこんな歌を口ずさんだ。

「いとどしく虫の音ねしげき浅茅生あさぢふに露置き添ふる雲の上人うへびと

かえって御訪問が恨めしいと申し上げたいほんです」

と未亡人は女房に言わせた。意匠を凝らせた贈り物などする場合でなかったから、故人の形見ということにして、唐衣からぎぬと裳もの一ひと揃そろえに、髪上げの用具のはいった箱を添えて贈った。

若い女房たちの更衣の死を悲しむのはむろんであるが、宮中住まいをしながら、寂しく物足らず思われることが多く、お優しい帝みかどの御様子を思ったりして、若宮が早く御所へお帰りになるようにと促すのであるが、不幸な自分がごいっしょに上がっていることも、また世間に批難の材料を与えるようなものであるうし、またそれかといって若宮とお別れしている苦痛たにも堪えきれ



る自信がないと未亡人は思うので、結局若宮の宮中入りは実行性に乏しかった。

御所へ帰った命婦は、まだ宵よいのままで御寢室へはいつておいでにならない帝を気の毒に思った。中庭の秋の花の盛りなのを愛していらっしゃるふうをあそばして凡庸でない女房四、五人をおそばに置いて話をしておいでになるのであった。このごろ始終帝の御覧になるものは、玄宗皇帝げんそうと楊貴妃ようきひの恋を題材にした白樂天の長恨歌ちやうごんかを、亭子院ていしんいんが絵にあそばして、伊勢いせや貫之つらゆきに歌をお詠よませになった巻き物で、そのほか日本文学でも、支那しなのでも、愛人に別れた人の悲しみが歌われたものばかりを帝はお読みになった。

帝は命婦にこまごまと大納言家の様子をお聞きになった。身にしむ思いを得て来たことを命婦は外へ声をはばかりながら申し上げた。未亡人の御返事を帝は御覧になる。

もったいなさをどう始末いたしてよろしゅうございますやら。こうした仰せを承りましても愚か者はただ悲しい悲しいとばかり思われるのでございます。

荒き風防ぎし蔭かげの枯れしより小萩こはぎが上ぞしづ心無き

というような、歌の価値の疑わしいようなものも書かれてある

が、悲しみのために落ち着かない心で詠よんでいるのであるからと寛大に御覧になった。帝はある程度まではおさえたいねばならぬ悲しみであると思召すが、それが御困難であるらしい。はじめて桐壺きりつぼの更衣こういの上がって来たころのことなどがお心の表面に浮かび上がってきてはいっそう暗い悲しみに帝をお誘いした。その当時しばらく別れているということさえも自分にはつらかったのに、こうして一人でも生きていられるものであると思うと自分は偽り者のような気がするとも帝は思いになった。

「死んだ大納言の遺言を苦勞して実行した未亡人への酬むくいは、更衣を後宮の一段高い位置にすえることだ、そうしたいと自分はい

つも思っていたが、何もかも皆夢になった」

とお言いになって、未亡人に限りない同情をしておいでになった。

「しかし、あの人はいなくても若宮が天子にでもなる日が来れば、故人に<sup>きこなき</sup>後の位を贈ることもできる。それまで生きていたいとあの夫人は思っているだろう」

などという仰せがあった。命婦<sup>みよづぶ</sup>は贈られた物を御前<sup>おまえ</sup>へ並べた。これが唐<sup>から</sup>の幻術師が他界の楊貴妃<sup>ようきひ</sup>に逢<sup>あ</sup>って得て来た玉の簪<sup>かざし</sup>であつたらと、帝はかいなこともお思ひになった。

尋ね行くまぼろしもがなつてにても魂<sup>たま</sup>のありかをそこと知る  
べく

絵で見る楊貴妃はどんなに名手の描<sup>か</sup>いたものでも、絵における  
表現は限りがあつて、それほどのすぐれた顔も持っていない。太<sup>たい</sup>  
液<sup>えき</sup>の池の蓮花<sup>れんげ</sup>にも、未央宮<sup>びおうきゆう</sup>の柳の趣にもその人は似ていたである  
うが、また唐<sup>から</sup>の服装は華美ではあつたであろうが、更衣の持った  
柔<sup>えん</sup>らかい美、艶<sup>えん</sup>な姿態をそれに思い比べて御覧になると、これは  
花の色にも鳥の声にもたとえられぬ最上のものであつた。お二人  
の間はいつも、天に在<sup>あ</sup>つては比翼の鳥、地に生まれれば連理の枝

という言葉で永久の愛を誓っておいになったが、運命はその一人に早く死を与えてしまった。秋風の音ねにも虫の声にも帝が悲しみを覚えておいでになる時、弘徽殿こきでんの女御にょごはもう久しく夜の御殿おとどの宿直とのいにもお上がりせずについて、今夜の月明に更ふけるまでその御殿で音楽の合奏をさせているのを帝は不愉快に思召した。このころの帝のお心持ちをよく知っている殿上役人や帝付きの女房なども皆弘徽殿の楽音に反感を持った。負けぎらいな性質の人で更衣の死などは眼中にないというふうをわざと見せているのであった。

月も落ちてしまった。

雲の上も涙にくるる秋の月いかですむらん浅茅生の宿あさぢふ

命婦が御報告した故人の家のことをなお帝は想像あそばしながら起きておいでになった。

右近衛府うこんえふの士官が宿直者の名を披露ひろうするのをもってすれば午前二時になったのであろう。人目をおはばかりになって御寢室へおはいりになってからも安眠を得たもうことはできなかつた。

朝のお目ざめにもまた、夜明けも知らずに語り合つた昔の御追憶ちようきがお心を占めて、寵姫あの在つた日も亡ないのちも朝の政務はお怠りになることになる。お食欲もない。簡単な御朝食はしるしだけ

お取りになるが、帝王の御朝餐<sup>ちようさん</sup>として用意される大床子<sup>だいしょうじ</sup>のお料理などは召し上がらないものになっていた。それには殿上役人のお給仕がつくのであるが、それらの人は皆この状態を歎<sup>なげ</sup>いていた。すべて側近する人は男女の別なしに困ったことであると歎いた。よくよく深い前生の御縁で、その当時は世の批難も後宮の恨みの声もお耳には留まらず、その人に関することだけは正しい判断を失っておしまいになり、また死んだあとではこうして悲しみに沈んでおいでになって政務も何もお顧みにならない、国家のためによろしくないことであるといつて、支那<sup>しな</sup>の歴朝の例までも引き出して言う人もあった。



幾月かのちに第二の皇子が宮中へおはいりになった。ごくお小さい時ですらこの世のものとはお見えにならぬ御美貌の備わった方であつたが、今はまたいつそう輝くほどのものに見えた。その翌年立太子のことがあつた。帝の思召おほしめは第二の皇子にあつたが、だれという後見の人がなく、まただれもが肯定しないことであるのを悟つておいでになつて、かえつてその地位は若宮の前途を危険にするものであると思ひになつて、御心中をだれにもお洩もらしにならなかつた。東宮におなりになつたのは第一親王である。この結果を見て、あれほどの御愛子でもやはり太子にはおできにならないのだと世間も言い、弘徽殿こきでんの女御にょごも安心した。その

時から宮の外祖母の未亡人は落胆して更衣のいる世界へ行くことのほかには希望もないと言って一心に御仏みほとけの来迎らいごうを求めて、とうとう亡なくなった。帝はまた若宮が祖母を失われたことでお悲しみになった。これは皇子が六歳の時のことであるから、今度は母の更衣の死に逢あった時とは違い、皇子は祖母の死を知ってお悲しみになった。今まで始終お世話を申していた宮とお別れするのが悲しいということばかりを未亡人は言って死んだ。

それから若宮はもう宮中にばかりおいでになることになった。七歳の時に書初めふみはじめの式が行なわれて学問をお始めになったが、皇子の類のない聡明そうめいさに帝はお驚きになることが多かった。

「もうこの子をだれも憎むことができないでしょう。母親のないという点だけでもかわいがっておやりなさい」

と帝はお言いになって、弘徽殿へ昼間おいでになる時もいっしょにおつれになつたりしてそのまま御簾みすの中にまでもお入れになつた。どんな強さ一方の武士だつても仇敵きゆうてきだつてもこの人を見ては笑みえが自然にわくであろうと思われる美しい少童しやうどうでありになつたから、女御も愛を覚えずにはいられなかった。この女御は東宮のほかには姫宮をお二人お生みしていたが、その方々よりも第二の皇子のほうがおきれいであつた。姫宮がたもお隠れにならな

いで賢い遊び相手としてお扱いになつた。学問はもとより音楽の

才も豊かであつた。言えは不自然に聞こえるほどの天才児であつた。

その時分に高麗人こまうどが来朝した中に、上手じょうずな人相見の者が混じつていた。帝はそれをお聞きになつたが、宮中へお呼びになることは亭子院のお誠いましめがあつておできにならず、だれにも秘密にして皇子のお世話役のようになってゐる右大弁うだいべんの子のように思わせ、皇子を外人の旅宿する鴻臚館こうろかんへおやりになつた。

相人は不審そうに頭なづけをたびたび傾けた。

「国の親になつて最上の位を得る人相であつて、さてそれでよいかと拝見すると、そうなることはこの人の幸福な道でない。国家

の柱石になって帝王の輔佐をする人として見てもまた違ふようです」

と言った。弁も漢学のよくできる官人であつたから、筆紙をもつてする高麗人との問答にはおもしろいものがあつた。詩の贈答もして高麗人はもう日本の旅が終わろうとする期に臨んで珍しい高貴の相を持つ人に逢つたことは、今さらにこの国を離れがたくすることであるというような意味の作をした。若宮も送別の意味を詩にお作りになつたが、その詩を非常にほめていろいろなその国の贈り物をしたりした。

朝廷からも高麗の相人へ多くの下賜品があつた。その評判から

東宮の外戚の右大臣などは第二の皇子と高麗の相人との関係に疑いを持った。好遇された点が腑ふに落ちないのである。聡明そうめいな帝は高麗人の言葉以前に皇子の将来を見通して、幸福な道を選ぼうとしておいでになった。それでほとんど同じことを占った相人に価値をお認めになったのである。四品しほん以下の無品親王むほんなどで、心細い皇族としてこの子を置きたくない、自分の代もいつ終わるかしれぬのであるから、将来に最も頼もしい位置をこの子に設けて置いてやらねばならぬ、臣下の列に入れて国家の柱石たらしめることがいちばんよいと、こうお決めになって、以前にもましているいろの勉強をおさせになった。大きな天才らしい点の現われてく

るのを御覧になると人臣にするのが惜しいというお心になるのであつたが、親王にすれば天子に変わろうとする野心を持つような疑いを当然受けそうにお思われになった。上手な運命占いをする者にお尋ねになつても同じような答申をするので、元服後は源姓を賜わつて源氏の某<sup>なにがし</sup>としようとお決めた。

年月がたつても帝は桐壺の更衣との死別の悲しみをお忘れになることができなかった。慰みになるかと思召して美しい評判のある人などを後宮へ召されることもあつたが、結果はこの世界には故更衣の美に準ずるだけの人もないのであるという失望をお味わいになつただけである。そうしたころ、先帝——帝<sup>みかど</sup>の従兄<sup>いとこ</sup>あるい

は叔父君おじぎみ――の第四の内親王でお美しいことをだれも言う方で、

母君のお后きさきが大事だいじにしておいでのなる方のことを、帝のおそばに奉仕ないしのすけしている典侍は先帝の宮廷にいた人で、後の宮へも親しく出入りして、内親王の御幼少時代をも知り、現在でもほのかにお顔を拝見する機会を多く得ていたから、帝へお話した。

「お亡かくれになりましたみやすどころ御息所の御容貌ようぼうに似た方を、三代も宮廷にありました私すらまだ見たことがございませんでしたのに、後の宮様の内親王様だけがあの方に似ていらっしゃいますことにはじめて気がつきました。非常にお美しい方でございます」

もしそんなことがあったらとおおみこころ大御心が動いて、先帝の後の宮へ



姫宮の御入内ごじゅだいのことを懇切にお申し入れになった。お后は、そんな恐ろしいこと、東宮のお母様の女御にょごが並みはずれな強い性格で、桐壺の更衣こういが露骨ないじめ方をされた例もあるのに、と思召して話はそのままになっていた。そのうちお后もお崩れかくになつた。姫宮がお一人で暮らしておいでになるのを帝はお聞きになつて、

「女御というよりも自分の娘たちの内親王と同じように思つて世話がしたい」

となおも熱心に入内をお勧めになった。こうしておいでになつて、母宮のことばかりを思つておいでになるよりは、宮中の御生

活にお歸りになつたら若いお心の慰みにもなろうと、お付きの女房やお世話係の者が言い、兄君の兵部卿親王ひょうぶけいしんおうもその説に御賛成になつて、それで先帝の第四の内親王は当帝の女御におなりになつた。御殿は藤壺ふじつばである。典侍の話のとおりに、姫宮の容貌も身のおとりなしも不思議なまで、桐壺の更衣に似ておいでになつた。この方は御身分に批ひの打ち所がない。すべてごりつばなものであつて、だれも貶める言葉おとしを知らなかった。桐壺の更衣は身分と御愛寵とに比例の取れぬところがあつた。お傷手いたでが新女御の宮で癒いやされたともいえないであろうが、自然に昔は昔として忘れられていくようになり、帝にまた楽しい御生活がかえってきた。あれ

ほどのこともやはり永久不変でありえない人間の恋であつたのであろう。

源氏の君——まだ源姓にはなつておられない皇子であるが、やがてそうおなりになる方であるから筆者はこう書く。——はいつも帝のおそばをお離れしないのであるから、自然どの女御の御殿へも従つて行く。帝がことにしばしばおいでになる御殿は藤壺ふじつぼであつて、お供して源氏のしばしば行く御殿は藤壺である。宮もお馴なれになつて隠れてばかりはおいではならなかつた。どの後宮でも容貌の自信がなくて入内した者はないのであるから、皆それぞれの美を備えた人たちであつたが、もう皆だいたい年がいつてい

た。その中へ若いお美しい藤壺の宮が出現されてその方は非常に  
恥ずかしがってなるべく顔を見せぬようになすつても、自然に  
源氏の君が見ることになる場合もあった。母の更衣は面影も覚え  
ていないが、よく似ておいでになると典侍が言ったので、子供心  
に母に似た人として恋しく、いつも藤壺へ行きたくなって、あの  
方と親しくなりたいという望みが心にあつた。帝には二人とも最  
愛の妃であり、最愛の御子であつた。

「彼を愛しておやりなさい。不思議なほどあなたとこの子の母と  
は似ているのです。失礼だと思わずにかわいがつてやってくださ  
い。この子の目つき顔つきがまたよく母に似ていますから、この

子とあなたとを母と子と見てもよい気がします」

など帝がおとりなしになると、子供心にも花や紅葉もみじの美しい枝は、まずこの宮へ差し上げたい、自分の好意を受けていたきたいというこんな態度をとるようになった。現在の弘徽殿の女御の嫉妬しつとの対象は藤壺の宮であつたからそちらへ好意を寄せる源氏に、一時忘れられていた旧怨きゅうえんも再燃して憎しみを持つことになった。女御が自慢にし、ほめられてもおいでになる幼内親王方の美を遠くこえた源氏の美貌びぼうを世間の人は言い現わすために光ひかるの君きみと言った。女御として藤壺の宮の御寵愛ちようあいが並びないものであつたから対句のように作って、輝く日の宮と一方を申していた。

源氏の君の美しい童形どうぎやうをいつまでも変えたくないように帝は思召したのであつたが、いよいよ十二としの歳に元服をおさせになることになった。その式の準備も何も帝御自身でお指図さしずになった。前に東宮の御元服の式を紫宸殿ししんでんであげられた時の派手はでやかさに落とさず、その日官人たちが各階級別々にさずかる饗宴きやうえんの仕度したくを内蔵くらり寮よう、穀倉院などでするのはつまり公式の仕度で、それでは十分でないと思召して、特に仰せがあつて、それらも華麗をきわめたものにされた。

清涼殿は東面しているが、お庭の前のお座敷に玉座の椅子いすがすえられ、元服される皇子の席、加冠役の大臣の席がそのお前にで

きていた。午後四時に源氏の君が参った。上で二つに分けて耳の所で輪にした童形の礼髪を結った源氏の顔つき、少年の美、これを永久に保存しておくことが不可能なのであるうかと惜しまれた。理髪おおくらぎやうの役は大蔵卿である。美しい髪を短く切るのを惜しく思うふうであつた。帝は御息所みやすどころがこの式を見たならばと、昔をお思い出しになることによつて堪えがなくなる悲しみをおさえておいでになつた。加冠が終わつて、いったん休息所きゆうしきじょに下がり、そこで源氏は服を変えて庭上の拝をした。参列の諸員は皆小さい大宮人の美に感激の涙をこぼしていた。帝はまして御自制なされがたい御感情があつた。藤壺の宮をお得になつて以来、紛れておいでに

なることもあつた昔の哀愁が今一度にお胸へかえつて來たのである。まだ小さくて大人の頭の形になることは、その人の美を損じさせはしないかという御懸念もありになつたのであるが、源氏の君には今驚かれるほどの新彩が加わつて見えた。加冠の大臣には夫人の内親王との間に生まれた令嬢があつた。東宮から後宮にとお望みになつたのをお受けせずにお返辞へんじを躊躇ちゆうちよしていたのは、初めから源氏の君の配偶者に擬していたからである。大臣は帝の御意向をも伺つた。

「それでは元服したのちの彼を世話する人もいることであるから、その人をいっしょにさせればよい」



という仰せであつたから、大臣はその実現を期していた。

今日の侍所ちむしうきんしよになつてゐる座敷で開かれた酒宴に、親王方の次の席へ源氏は着いた。娘の件を大臣がほのめかしても、きわめて若い源氏は何とも返辞をすることができないのであつた。帝のお居間のほうから仰せによつて内侍ないしが大臣を呼びに来たので、大臣はすぐに御前へ行つた。加冠役としての下賜品はおそばの命婦が取り次いだ。白い大桂おおうちぎに帝のお召し料のお服が一襲ひとかさねで、これは昔から定まつた品である。酒杯を賜わる時に、次の歌を仰せられた。

いときなき初元結ひに長き世を契る心は結びこめつや

大臣の女との結婚にまでお言い及ぼしになった御製は大臣を驚かした。

結びつる心も深き元結ひに濃き紫の色しあせずば

と返歌を奏上してから大臣は、清涼殿の正面の階段を下がって拝礼をした。左馬寮の御馬と蔵人所の鷹をその時に賜わった。そのあとで諸員が階前に出て、官等に従ってそれぞれの下賜品を得た。この日の御饗宴の席の折り詰めのお料理、籠詰め菓子などは皆右大弁が御命令によって作った物であった。一般の官吏に賜

う弁当の数、一般に下賜される絹を入れた箱の多かったことは、東宮の御元服の時以上であつた。

その夜源氏の君は左大臣家へ婿になつて行つた。この儀式にも善美は尽くされたのである。高貴な美少年の婿を大臣はかわいく思つた。姫君のほうが少し年上であつたから、年下の少年に配されたことを、不似合いに恥ずかしいことに思つていた。この大臣は大きい勢力を持った上に、姫君の母の夫人は帝の御同胞であつたから、あくまでもはなやかな家である所へ、今度また帝の御愛子の源氏を婿に迎えたのであるから、東宮の外祖父で未来の関白と思われている右大臣の勢力は比較にならぬほど気押けおされてい

た。左大臣は何人かの妻妾さいしやうから生まれた子供を幾人も持つていた。内親王腹のは今蔵人少将くろつとであつて年少の美しい貴公子であるのを左右大臣の仲はよくないのであるが、その蔵人少将をよその者に見ていることができず、大事にしている四女の婿にした。これも左大臣が源氏の君をたいせつがるのに劣らず右大臣から大事な婿君としてかしくかれていたのはよい一對のうるわしいことであつた。

源氏の君は帝がおそばを離しにくくあそばすので、ゆつくりと妻の家に行っていることもできなかつた。源氏の心には藤壺ふじつぼの宮の美が最上のものに思われてあのような人を自分も妻にしたい、

宮のような女性はもう一人とないであろう、左大臣の令嬢は大事にされて育った美しい貴族の娘とだけはうなずかれるがと、こんなふうに使われて単純な少年の心には藤壺の宮のことばかりが恋しくて苦しいほどであった。元服後の源氏はもう藤壺の御殿の御簾の中へは入れていただけなかった。琴や笛の音の中にその方がお弾きになる物の声を求めるとか、今はもう物越しにより聞かれないほのかなお声を聞くとかが、せめてもの慰めになって宮中の宿直ばかりが好きだった。五、六日御所にいて、二、三日大臣家へ行くなど絶え絶えの通い方を、まだ少年期であるからと見て大臣はとがめようとも思わず、相も変わらず媚君のかしずき騒ぎを

していた。新夫婦付きの女房はことにすぐれた者をもつてした  
り、気に入りそうな遊びを催したり、一所懸命である。御所では  
母の更衣のものと桐壺を源氏の宿直所にお与えになって、御息所<sup>みやすどころ</sup>  
に侍していた女房をそのまま使わせておいでになった。更衣の家  
のほうは修理<sup>しゆり</sup>の役所、内匠寮<sup>たくみりょう</sup>などへ帝がお命じになって、非常な  
りっぱなものに改築されたのである。もとから築山<sup>つきやま</sup>のあるよい庭  
のついた家であったが、池なども今度はずっと広くされた。二条  
の院はこれである。源氏はこんな気に入った家に自分の理想どお  
りの妻と暮らすことができたらと思つて始終歎息<sup>たんそく</sup>をしていた。

光<sup>ひかる</sup>の君という名は前に鴻臚館<sup>こうろかん</sup>へ来た高麗人<sup>こまうど</sup>が、源氏の美貌<sup>びぼう</sup>と天

才をほめてつけた名だとそのころ言われたそうである。

## 「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡をいただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

\*\*\*\*\*

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML（一部は HTML）形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



---

一冊堂・青空文庫 pdf データ

2016 年 3 月 15 日 第一期製作

原 稿 青空文庫

発行者 佐藤 聖

発行所 一冊堂

〒165-0025  
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘 C 室  
mail : [issatudo@gmail.com](mailto:issatudo@gmail.com)

---